

^m
h

ハヤカワ・ミステリ文庫 〈HM①-41〉

火曜クラブ

アカサ・クリスティー
中村妙子訳

早川書房

訳者略歴 昭和29年、東京大学文学部卒、英米文学翻訳家 主訳書「春にして君を離れ」「愛の重さ」「暗い抱擁」「愛の旋律」「未完の肖像」クリスティー（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior

火曜クラブ

〈HM①-41〉

昭和五十三年十一月二十日 印刷
昭和五十三年十一月三十日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 A・クリスティー

訳 者 中村 妙子

発 行 者 早 川 清

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号 東京・六一四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

ハヤカワ・ミステリ文庫

〈HM①-41〉

火曜クラブ

アガサ・クリスティー

中村妙子訳

^m
h

早川書房

868

THE THIRTEEN PROBLEMS

by

Agatha Christie

1932

レオナルドと
キャサリン・ウーリーに

著者のことば

この『十三の事件』によって、ミス・マープルはじめて探偵小説の世界に登場する。ミス・マープルはわたし自身の祖母に、どこか似ているところがある。祖母もやはり桜色の頬をした色白の老婦人で、世の中からまったくひきこもったむかし風のくらしをしていたくせに、人間の邪悪さというものを底の底まで知りぬいているような人だった。祖母に、「でも、おまえはあの人たちのいうことを、うのみに信じているのかい。それはやめたほうがいいよ。わたしならそうはしませんよ!」ととがめるように言われると、まるでこちらがとんだ世間知らずのおっちょこちょいのような気がしたものだ。た。

ミス・マープルの話は、書いていてとてもたのしかった。わたしはこのふうわりした感じの老婦人に愛情をいただき、

どうか彼女が読者に歓迎されるようにとねがったのだった。六話まで発表したのちに、もう六話追加してほしいとのぞまれた。ミス・マープルはたしかに読者の興味をつないだのである。

今ではミス・マープルは数冊の本に登場し、劇にもあつかわれている。人気の点では、エルキュール・ポアロとどっちかというほどだ。わたしのところにくる手紙は半数は、「どうか、ポアロでなく、いつもミス・マープルを登場させてください」といってよこし、あとの半数は、「ミス・マープルを出さずに、ポアロを出してください」と書いている。わたし自身はどちらかといえば、ミス・マープルのかたをもつ。彼女の本領はみじかい謎と場合にとくに発揮されるようだ。そういう問題がしたしみやすい彼女のスタイルにびったりするのだろう。一方、ポアロの才能を発揮するにはどうしても長篇が必要となっている。

この『十三の事件』は、ミス・マープルを愛する人々にとっては、彼女の真髄を知るに足る一冊ではないかと思う。

目次

第一話	火曜クラブ……………	二
第二話	アシタルテの祠……………	三
第三話	金塊事件……………	五
第四話	舗道の血痕……………	七
第五話	動機対機合……………	九
第六話	聖ペテロの指のあと……………	一三
第七話	青いゼラニウム……………	一五
第八話	二人の老嬢……………	一六
第九話	四人の容疑者……………	一九
第十話	クリスマスの悲劇……………	二三

第十一話 毒草……………二五二

第十二話 バンガロー事件……………二七七

第十三話 溺死……………三〇三

訳者あとがき……………三三七

火曜 クラブ

第一話 火曜クラブ

The Tuesday Night Club

「迷宮入り事件」

レイモンド・ウェストは、タバコの煙をばっとはきだしてくりかえした。ゆっくり味わいかえしているようなられしそうな口調だった。

「迷宮入り事件」

レイモンド・ウェストは満足そうに一座を見まわした。古風な部屋だった。天井には太い黒っぽい梁がわたされ、部屋相応にどっしりした古めかしい家具が置かれている。レイモンド・ウェストがこのもしげに眺めたのもむりはなかった。レイモンド・ウェストは作家だった。非のうちどころのない雰囲気にはたることをこのんだ。ジェーン伯母の家は、彼女というあるじの背景としてうってつけだという点が彼の氣にいらっていた。レイモンドは、大きな安楽椅子にしゃんとした姿勢で腰かけている伯母を暖炉ごしに見やった。ミス・マーブルは腰のまわりをぐっとつめた黒いブロードの服を着ていた。胴着の前のところにメクリンレースが滝のようにあしらわれ、手には黒いレースの指なし手袋をはめ、雪白の髪を高々とゆいあげた上に黒いレースのキャップをのせている。ミス・マーブルはなにやら白いふわふわしたものをつんでいた。彼女は年よりら

しいやさしそうな目で、甥のレイモンドとそのお客たちを静かにうれしそうに眺めていた。まず意識していらくにふるまっている甥のレイモンド、それから女流画家のジョイス・ランプリエールの黒いショートカットと一風変わった光沢のあるはしばみ色のひとみ。つぎに身だしなみのしごくよい世なれた紳士のサー・クリザリング。お客はもう二人いた。一人はペンダー博士といって、この教区の老牧師。それから弁護士のパザリック氏、眼鏡ごしにじろっと相手を眺めるくせのあるひからびた小男だった。ミス・マープルは一座の人々にひとわたり目をくると、くちびるのあたりにかすかに微笑をうかべて、またせつせと編みものをはじめた。

ペザリック氏がいつものくせで、話の前おきがわりの小さなから咳の音をたてた。

「なんと言われましたな、レイモンド君？　迷宮入り事件だって？　はあ——で、それがどうだって言われるんですね？」

「べつに、どうってこと、ありませんのよ」とジョイス・ランプリエールがひきとった。「レイモンドはね、ただその音が気にいったんですわ。それと、口に出してそう言ってみるご自分がね」

レイモンドがちらりととがめるような視線を送ると、ジョイスは顔をのけぞらせて笑い声をたてた。

「このひとつ、たいへんな気どり屋さんですわね。そうじゃございません、マープルさん？　そうお思いになりますでしょう？」

ミス・マープルはやさしくほほえみかえしたが、なにも言わなかった。

「人生そのものが、いわば迷宮入りですよ」と、牧師がおごそかな口調で言った。

レイモンドは坐りなおして、シガレットをぽんとなげすてた。

「ぼくの考えていたのはそういうことじゃあないんですよ。哲学めいた意味じゃなくて、現実におこった、赤裸々な散文的な事実のことを考えていたんです。まだだれもちゃんとした説明をくわえたことのないいろいろな事実をね」

「わたし、ちょうどそういう話を知っていますよ」とミス・マープルが口をはさんだ。「ついで、きのうの朝のことですがね、カラザーズの奥さんがとても奇妙な目にあいなすったんですよ。エリオットの店で皮をむいた小えびを二ジル（一ジルは四分の二パイント）ばかり買いなすったあと、もう二軒ばかりよってかえると、かんじんのえびがないんですって。あとからよった二軒の店に、もういっぺん行ってみたそうですけれど、どこにも影も形も見えなかったんですとさ。ふしぎな話じゃありませんかね？」

「まったくもって、奇妙なお話ですな」とサー・ヘンリーがまじめくさって駄じゃれを言った。「むろん、説明のしようはいろいろありますわね」とミス・マープルは興奮に顔をうっすら染めていた。「たとえばだれかが――」

「伯母さん」と、レイモンド・ウェストが少々おかしそうに言った。「そういったありきたりな村のできごとじゃないんですよ。ぼくの考えているのはですね、殺人事件とか、失踪事件とか、サー・ヘンリーなら、おこのみ次第、なん時間でも長広舌をふるうことがおできになるような、そうした事件のことなんですよ」

「しかし、わたしは、だいたい仕事の話はしない習慣にしていますね」とサー・ヘンリーが控えめな口調で言った。「いや、まったくの話」

サー・ヘンリー・クリザリングは最近まで警視総監の要職にあったのである。

「殺人事件だのなんだので、警察にもとうとう解決できずじまいという事件は、ずいぶんいろいろ